



建築設計製図Ⅱ

第1課題
集まって住む住まい

2年1組

担当：
若色 峰郎
片桐 正夫
野村 欽
小川 守之
佐藤 光彦
白井 勇
横山 聡
26

末岡 佐江子

これまでの建築は、将来的には取り壊すという前提によって計画されてきた。それは非常に画一的で可変性がない。しかし、集合住宅というのはそれぞれ個性の異なった人間が集まって構成されているのだから、各住戸は住み手の要望に対応可能な空間構成でなければならない。本計画はこのことを自分なりにシステム化することを試みたが、分からないことが多くもう一度やりたいテーマとなった。

指導=佐藤 光彦

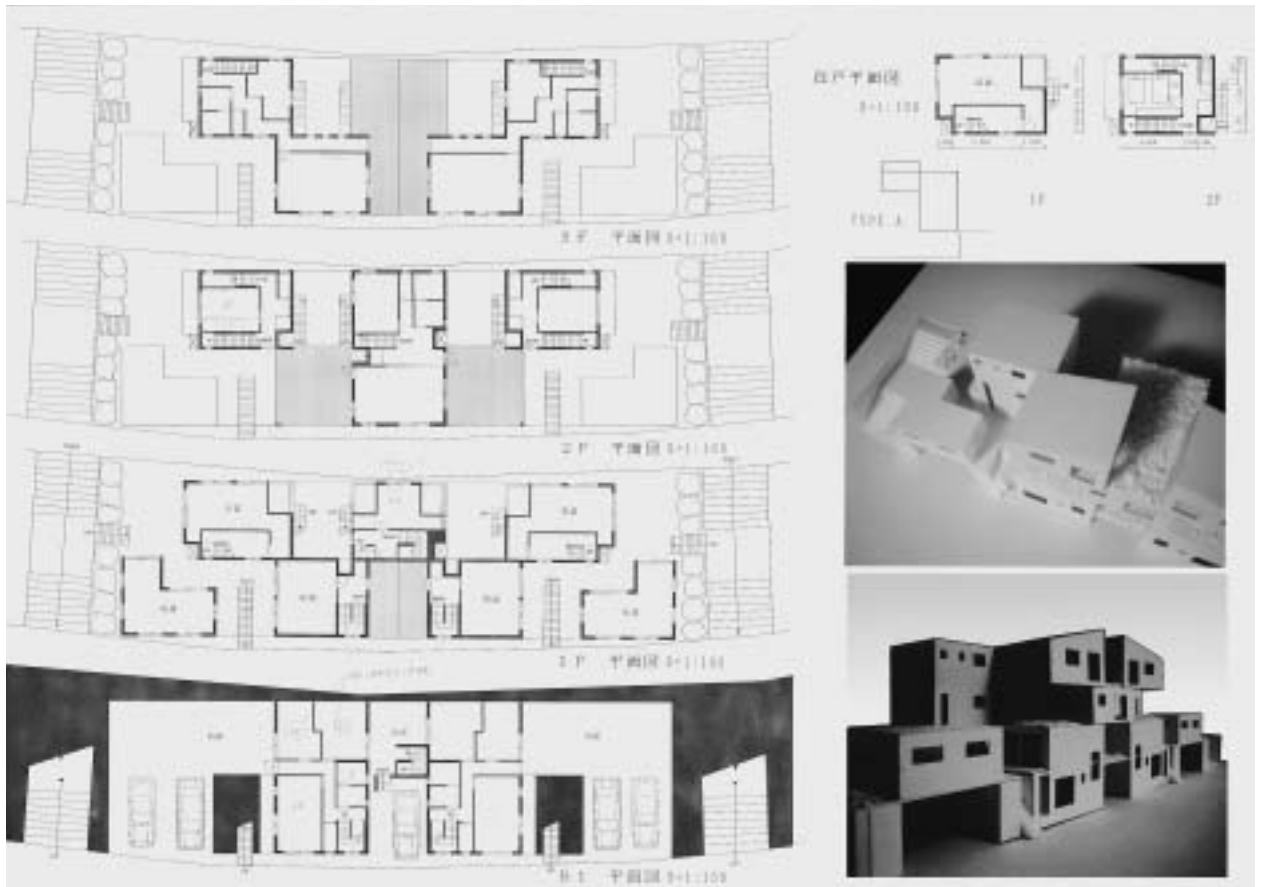
異常に細長い敷地の形状、接す

る2本の道路の高低差と性格の違い、という特殊な条件のもとで都市における集合住宅を考える、という課題は大変興味深いものであった。あまり特徴のないニュートラルな敷地より、このような課題のほうが、とりあえず対応すべき条件が明確であるぶん、設計に取り組みやすいと思うのだが、敷地条件にさえ対応しきれていない作品が多かったようだ。

末岡さんの作品は、実にシンプルな解答であるが、敷地への対応と集合住宅のあり方に対する提案が、ともうまくまとめられており、群を抜いていた。密集した地域の中のリニアな敷地に対して、住戸部分とパブリックな部分の2重の構成とす

ることによって、周囲の環境にうまく対応できており、また都市における土地の利用のされ方、所有形態への提案にもなり得ているように思えた。

地上部分は、店舗やイベントスペース、パーキングとしてパブリックな用途に開放されるとともに、2つの道を結びつけている。低層集合住宅でありながら地面から切り離された住戸部分は、家族構成の変化に伴ってプランの変更が可能な3層のヴォリュームとして考えられている。詳細な部分模型もこの設計をよく表現できているが、地上部分の計画について、もう少し具体的な提案と図面での表現があれば、さらに説得力のある作品になったであろう。



梨本 絵美



梨本 絵美

ここ本郷には、人々の交流から生まれたと考えられる〈あたたかみ〉があります。この〈あたたかみ〉が、本郷という地域の“活性化”につながるような集合住宅を考えました。

住宅の1Fに店舗を入れることによって、商人と客・客と客・住人と商人・商人と商人などといった様々な立場での交流が生

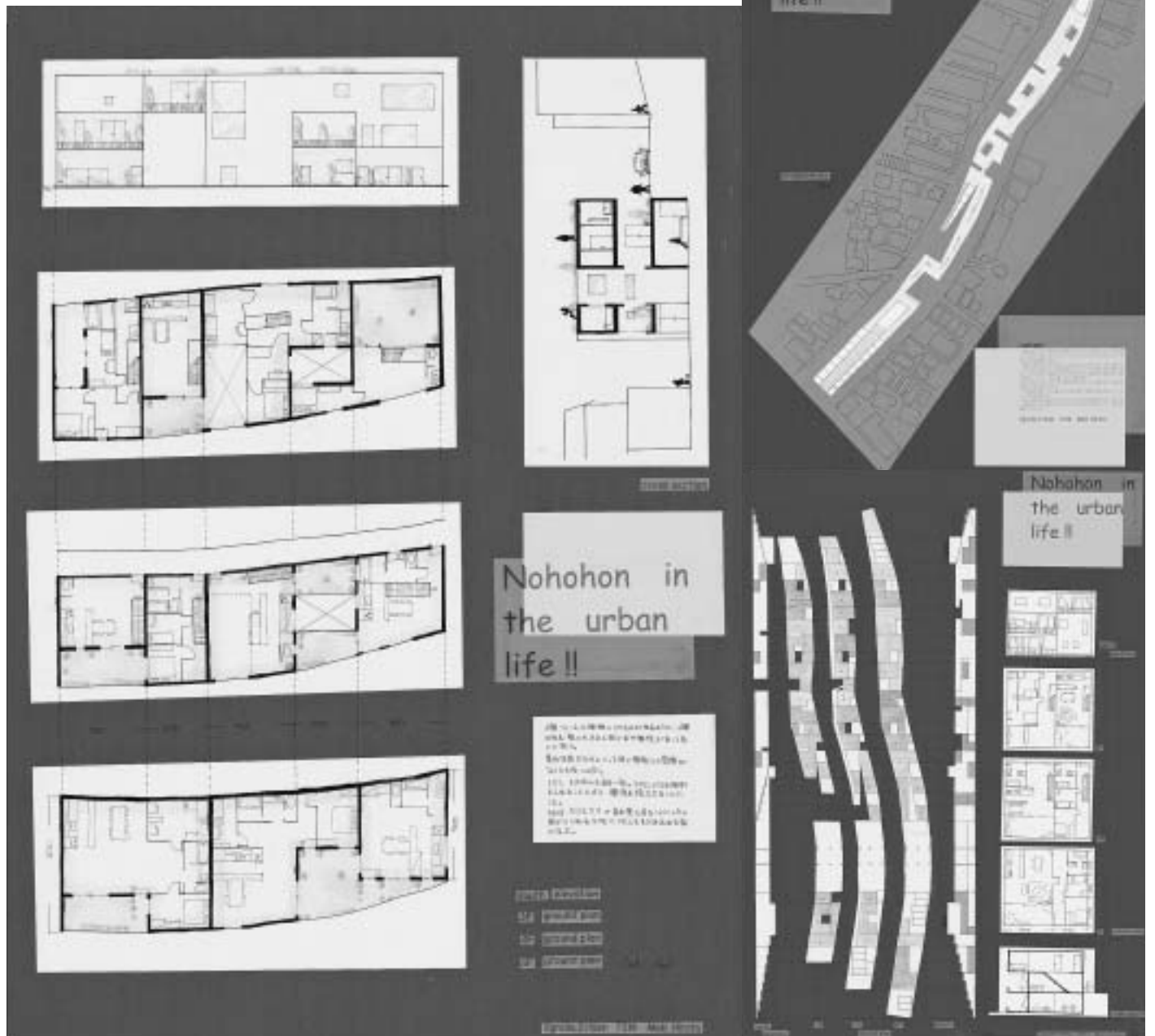
まれます。もちろん住人同士も含まれます。つまり、“店舗が人を動かす”という考えで設計しました。

また、このような交流は地域に対する“信頼”と“愛着”を生み、地域の活性化へとつながると考えました。

指導＝若色 峰郎

低層集合住宅の場合は、接地性、コモンスペース、プライバシーなどが計画条件として大きな課題となるが、この敷地の場合は、これらの他に菊坂通りという商店街に面していることや、2面道路（一層分のレベル差）に面しているという制約があり、2年生としては、ややハードなものになっていると思う。

梨本君の案は1階に店舗、2、3階、または地階に住宅という断面構成とし、店舗の入口も道路側のみとせず、道路（パブリックスペース）→引き込まれた間の空間（セミパブリックスペース）→店舗または住宅の入口（セミプライベートスペース）というようにアプローチ空間に対するヒエラルキーを持たせたことが成功している。また、住棟の空間構成もスケールの分節がみられ、周辺の街の状況に合致している点や、各層に設けられた風通しのよいテラス（屋上庭園）も評価できる。問題点としては、地階の住戸の環境条件が悪いことや、住戸の専用階段や水廻りスペースの計画はもう一工夫ほしいところである。



建築設計製図Ⅱ

第1課題
集まって住む住まい

2年2組

- 担当：
 本杉 省三
 宇杉 和夫
 高宮 真介
 川口 とし子
 野沢 正光
 前田 光一
 吉井 信幸
 28

平田 真貴

都会には都会での住み方があ
 る。田舎と同じように住むこと
 はできない。自然の森はないが、
 人工の森、つまりビル群はある。

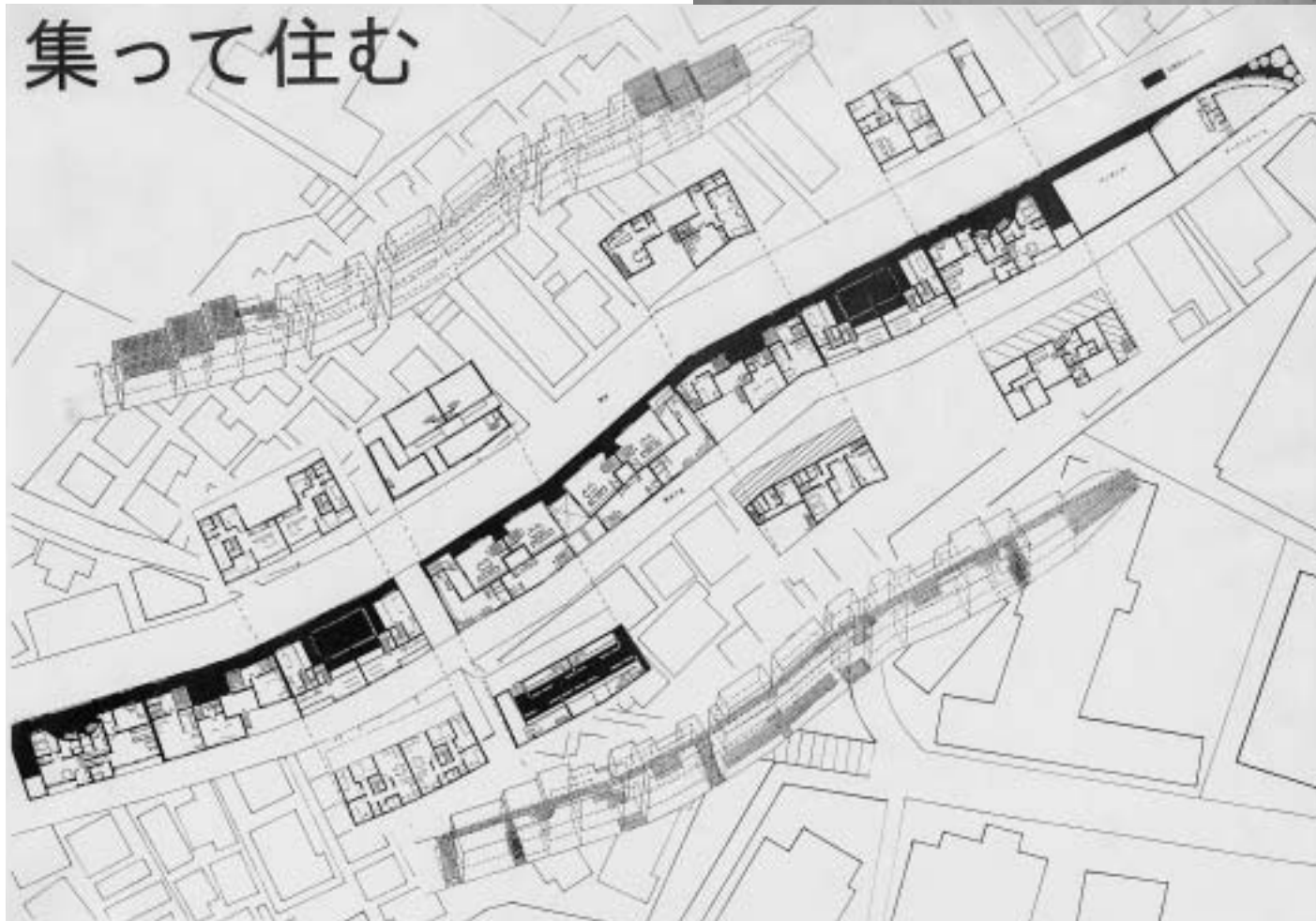
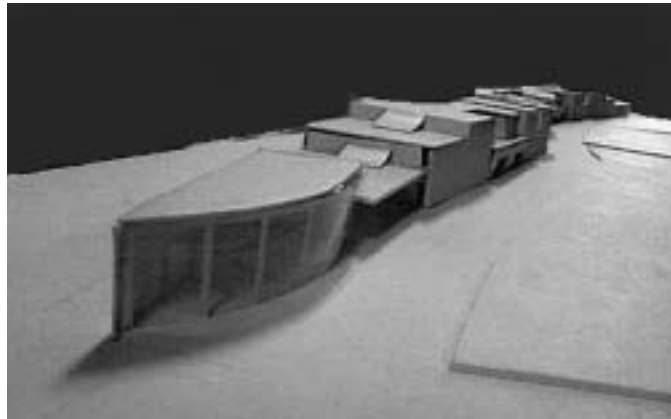
何よりも素晴らしいのは、人工
 の森に実ってる星は日が沈むに
 つれ姿を現すことだ。この集合
 住宅は、人工の森の日々の移り
 変わりを眺めることのできるス
 ペースとして屋上を活用した。
 田舎には必要ない集合住宅に住
 んでいるのは、自分が都会に住
 んでいるからだ。ならば、ここ
 に溶け込んでいこう。

指導=野沢 正光

Nohohon in the urban life
 というTVコマーシャルもどきの
 タイトルが示す作者の都市生
 活像が、ここにはとても魅力あ
 るものとして提示されている。
 いわゆるゼロロットで計画され
 たこの集合住宅建築はいくつも
 の孔やくぼみを持ち、建築の内

に光や風、そしてとなりや道の
 気配を住まいにほどよく運んで
 くれそうに見える。周辺の比較
 的ひらけたところは、大きなオ
 ープンスペースとなっていて気
 持ちがいい。その空中を雁行し
 ながら行くみどりの帯はもちろん
 開放され草木に覆われた、階
 段状に大地とつながっている屋
 上の原っぱを繋ぐ。住戸はなん
 と5、7、5、7、7の比例で区
 画されていて、しかもどの住戸
 もひとつとして同じでない。こ
 のプロジェクトがのほほん、の
 ほほんのTVコマーシャルと縁
 がありそうなことはこうしたこ
 とから想像がつくが、それがす
 こしも軽薄に映らないのは、そ
 れが作者の気分そのものである
 からであろう。

村山 純子
結城 恵利子
若松 美帆子
渡辺 奈美



村山 純子
結城 恵利子
若松 美帆子
渡辺 奈美

細長い土地に計画する集合住宅の問題点を考えてみたところ、住民同士の交流がとりづらい、ということが挙げられた。そこで、コモンスペースとして、住宅全体に土間的空間を通し、住民や地域の人々が集まれるオープンスペースを設けた。この土間は、各戸の土間でもあり集合住宅全体が提案する、地域に対しての土間でもある。

指導=本杉 省三

このごろはあまり出掛ける余裕

がなくなってしまったが、本郷に住まうようになってしばらくはよく散歩をしていた。細い路地から路地へ歩いては、木造3階建てや古い瓦屋根の佇まいや何百年も生き続けてきた大きな木に、都心ながらこんな場所もあるのかと楽しくなりました。小さな発見が町のあちこちにあることを教えてくれたのが、そんなぶらぶら歩きの散歩でした。この敷地は、そうした思いがけない場所の1つです。初めの説明に当たって、本郷の歴史や東京の地形、地勢と生活空間や町の構造等を話しました。その時、ひとりで独自に考えるのもいいけれど、是非グループを組んで共通の理念をみんなて話し合ってみよう、それを

もとに各自受け持ち分を計画してごらんと提案しました。その期待に応えてくれたのがこの案です。課題設計に取り組むに当たって、もっと仲間と議論し合っていたらいいと常々思っているのですが、なかなかこれが難しい。授業時間中に彼女らの議論を聞くことはできませんでしたが、しかし「土間」をキーワードとして各自が隣関係を考慮しながら自分のアイデアを作り出してみせたことは価値あることだと評価しました。独りよがりにならず、周りとの調整を図りながら、この場に相応しい集合住宅を共同で考えてみる、それが設計であり、街・社会を形成していく一歩であることを感じてくれたように思います。